
神様おまもり隊！

戯言

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様おまもり隊！

【Nコード】

N0589E

【作者名】

戯言

【あらすじ】

「おぬしは他人とは違った能力を宿しているのじゃ」突然神様から言い渡された命令、それは神様を守ることだった！さて、青年は見事刺客から神様を守り通すことができるのか！？弱きを助け、強きを挫く？神様おまもり隊、ただいま見参！

守護その1：選ばれしもの！？（前書き）

もう一つの連載物終わらないうちに違う連載物書きちゃいました。
同時進行できるかな？

守護その1：選ばれしもの！？

夏。

ドでかいビルが立ち並ぶ街中。

太陽にじりじりと焼かれたアスファルトに立つ、陽炎。

そんな灼熱地獄の町を、一人の青年が歩いていく。

「あ、あぢい……。」「

その青年以外は誰も歩いていない、狭い路地裏。

青年は額の汗も拭わずに、一心に自転車を押して歩いている。

「うーん、ヒートアイランドオオオウ！！」「

青年は叫んだ！この想いよ空に届けとばかりに！

「くっ！よけいに熱くなっちゃった……。どーしてくれんだよー、神様」

「か、神様を悪く言うな！」

「ん？」

いつの間にか、男の後ろに一人の少女が立っていた。
しかも、教会にいるシスターのような服を着て。

「。。。。。」

「神様は忙しいんです！あなたのような自分の事しか考えてないよ
うな自己中人間の願いなんか、叶える時間は無いんです！」

青年は反論した。

「はあ！？今いきなり会った奴にそんな事言われたくねえよ！お前
に俺の何が分かるつつうんだよ！」

「初対面でも分かります！だって顔に書いてありますもん。僕は悪
人です、って」

「俺は言うほど悪人じゃねえよ！大体顔になんか書いてあるか！」

「そう言うと思ったので、さっき書いておきました」

「なにに！？いつの間に！」

「まったく、気付かなかったのですか？あなた、隙だらけでしたよ
？」

「お前は初対面の奴の顔に落書きするような奴なんだな！？そんな
んだな！？」

ゴゴゴゴゴゴ……。

その時、雲が割れ、中から元気な赤ちゃんが！じゃなくて……。
その時、雲が割れ、その間から声がした。

「君たち、喧嘩は止めるんだ……。」「

「こ、この声は……！」「

「な、なんだなんだ!？」

「か、神様・・・!」

「な、なにに!？」

空からいかにも神様っぽい人が降りてきた。
後ろから後光が射している。

「神様! 訊いてください! この自己中男が神様の事をバカにしてたんですよ?」

「バ、バカにはしてねえよ!」

「な、なにに!?! バカにしていただとう!?!」

「人の話聞かねえ神様だなおい!」

「そんな君には罰を与えねばならんな・・・。」

「だから話を聞けって!」

「よし、では君にあれをさせようかの」

「ちくしょう、なんなんだよ・・・。」

「それはだな・・・、」

・

・ ・ ・ ・ ・

神様の話はこうだった。

この世界には神に逆らう輩がいる。

その者どもは、神を消そうとたくさんの刺客を送ってくるらしい。
だから、その者たちを迎え撃つ機関が作られたらしい。

その名も「皆で神様守りましようの会」

略して「M^エ・K^ム・M^ケ・K^ツ」

「名前の付け方が安易でしかもかつこわりー！」

「つべこべ言わないの！」

「うおっほん！話を続けるぞ？それでな・・・、」

そして、ここにいる少女もその一員らしい。

「へえ、こいつが？」

「そうです！人は見かけに寄らないんですよ？私みたいにかわゆい
女の子でも、」

「実はムキムキの女版キ　肉マンって事だな？」

「ちっがーう！」

「じゃ、何？」

「わたしはちょっとした特殊能力ってやつが使えるんです」

「筋肉がムキムキに、」

「なりません！」

少女が悲痛な叫びを上げる。

「じゃあ、何？」

「はぁ・・・、何でそんなに筋肉ネタが好きなんですか？女の子がムキムキっていうのは、あなたにとってそんなに萌える要素なんですか！？」

「いや、全然？むしろ嫌だ」

「じゃあもういい加減筋肉ネタはやめてください！」

「ちっ、しょうがねえ・・・。」

「しょうがないです！」

「これこれ、五月蠅いぞい。話を聞け」

「これ以上聞かなくても何となく先が読めてくるぜ」

「ほう？では言ってみい」

「ようするに、俺にその格好悪い名前の機関に入って、神様を守れ
って事だろ？」

「格好悪いって言うな！」

「ま、そういう事だな」

青年はしかし、と首をかしげる。

「そうは言うけどな？俺は特別、力が強いワケでも無いし、この女
みたいに筋肉がムキムキになるわけでもないんだぜ？」

「わたしは筋肉ムキムキになりません！何度言ったらわかるんです
か！」

少女が再び叫ぶ。

「まあまあ、落ち着くのじゃ。君も、あまりこの子をいじめるでな
い。」

「でも、こいつをいじつてるとなんとなく面白いし」

「人で遊ばないで下さい！」

「これ、うるさいぞ。それでな青年、きみはまだ気付いてない、と
いうか目覚めてないのだが・・・、きみも他人とは違う、特殊な力
が宿っているのじゃよ」

「ほ、ほう？」

青年は少し驚いた顔をする。

「実はわたし達『M・K・M・K』は神様をお守りする以外に、素質のありそうな人たちを勧誘して仲間を増やしたりもしてるんです。それで、他の人たちより一際大きい力を発していたあなたに前々から目を付けていたんです」

「なるほどな、つーことはお前は俺をずっと尾行していたんだな？」

「そうです！毎日毎日アンパン片手に……。」

「間抜けだな」

「うるさいですっ！」

「声を掛けてくれたら、茶くらい出したのに」

「ほ、本当ですかっ？」

「嘘だ」

「ひどいいい……。」

「で、神様よー。俺の特殊能力って、一体なんだ？」

「それはまだ分からん」

「は、はあ!？」

青年はがっかりした表情を浮かべる。

「一度、機関の本部で訓練して無理矢理能力を目覚めさせて見るしがあるまい」

「そうか、訓練しないとだめなのか・・・。」

「そうがっかりするでない。おぬしは見込みがあるから、のうりよくが目覚めるのにそう時間はかかるまい」

「そ、そうなのか・・・。」

「ということ、おぬしにはわしらに着いて来てもらっぞ?良いな?」

「ま、仕方ないだろ?神様の命令だし」

「ま、そうじゃな」

「そうと決まれば、早速本部に行きますよ?」

「うむ、あとの事はよろしく頼んだぞ?」

「はい、おまかせ下さい!」

「では、わしはそろそろ行くかの。神階は神階で色々忙しいのじゃ」

そう言って、神様はまた空に昇っていった。

「さて、それでは行きましょうか」

「おう」

「おっとその前に、あなたの名前をお聞かせ願えますか？」

青年は名乗った。

「俺の名前は『観鏡みかがみ 要かなめ』だ」

「ここから、青年『観鏡 要』のお仕事が始まる。」

守護その1：選ばれしもの！？（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

いや、なんかよく分からない小説に仕上がっちゃいそうですね・・・。

もう一個の小説も更新しなきゃいけないのに、同時進行なんて僕にできるのでしょうか・・・？

とりあえず、温かい目で見守ってやってください。

感想、よろしく願います！

守護その2：地獄の訓練（前書き）

夜遅くまで頑張りましたよ。

守護その2：地獄の訓練

「ひい！もう無理！ゴメンなさい！」

ここは『M・K・M・K』地下訓練場。

青年、観鏡 要が床にへばりついている。

その前に、巨大なトゲトゲバット片手に仁王立ちになっている少女。

「ほら、早くたつて下さい！訓練はまだ始まったばかりですよ？」

「始まったばかりつつたつて、こりや厳しすぎだろ、いくらなんでも！」

「全然？むしろ軽いほうです」

「いや、お前らにとっては軽いかもしれんが、俺はついさっきまで一般市民やってた奴だぞ！？そんな奴にこんな仕打ちはあまりにも・
・・！」

「つべこべ言わずに立って下さい！ほら、行きますよ！」

そう言っって少女は巨大なトゲトゲバットを構える。
すると、要は泣きそうな顔になる。

「ゴ、ゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいいいい
い・・・。」

「はあ、情けないですねえ・・・。」

「大体、トゲトゲバットを持って襲ってくるお前から逃げ続けるだけで、俺の能力がホントに目覚めんのか？」

「知りません」

「無責任だなオイ！お前は俺を目覚めさせたいのか永眠させたいのかどっちなんだ！？」

「この訓練で目覚めた人だっているんです、我慢してください」

「やだ、俺死んじゃう！」

「大丈夫です、殴るときはみねうちにしときますから」

「それ、みねドコだよ！？どこもかしこもトゲトゲだらけじゃねえか！」

「いえ、これ、トゲトゲはずれるんですよ？便利ですよねえ」

そう言つて少女は、持っているトゲトゲバットのトゲトゲの一部分をはがす。

「これで昔みたいに、間違つて撲殺してしまう、なんて事が少なくなつて大助かりですよ？」

「ちょっと待ておい！いったい昔なにがあつた――！！」

「やだなあ、そんな事いちいち気にしてたら、・・・きりが無いで

すよ・・・?」

「もうやだ!誰か助けてくれえ!!」

要は、出口に全力ダッシュする。

マオのB・ダッシュも真つ青の走りっぷりだった。
しかし。

「・・・まあておおおるうううあああああ!!!!」

「ひ、ひいつつ!!」

少女は鬼神のごとき形相で要を追ってきた。
文字通り、鬼のような速さ。

マオも泡を吹くであろう速さである。

「ゴ、ゴメンなさいゴメンなさいいいい・・・。」

「てめエ、この野郎・・・、何逃げようとしてんだ?ああ!」

「ひいつ!!」

それはもう少女ではない。

形は少女だが、絶対に、人間の皮をかぶった鬼だ。

要は本気でそう思った。

「てめエ、能力欲しくねえのか!?ああ!」

「ほ、欲しいです!」

「じゃあ、しっかりしろや!」

「は、はい!」

「よっしゃ、じゃあ始めっか」

「わ、分かりました!」

「じゃ、追いかけますよ? いいですか?」

少女の口調が元に戻った。

「よい、・・・スタート!」

要が走り出し、その後を少し遅れて少女が追いかける。

しかし、あっという間に距離が縮まり・・・、

「はぐうおあ!」

鈍い音と共に、要が倒れる。

「まったく、骨がないですね」

「お前が異常過ぎるんだ・・・。」

「そうなんですか? わたしはこれが普通だと思いますけどね」

「それはお前の間違いだ。ほとんどの人間はそんな速さで走らない」

「いや、走りますよ?」

「お前、オリンピック出てろよ……。」

要が溜め息を吐く。

「いえ、出れませんよ。世の中にはわたしより速い人なんて幾らでもありますよ」

「俺の知り合いにはいないけどな」

「ふつ、要さんに友達なんているんですか?」

「いるよ!?俺にだって!友達ぐらい!」

「いえ、きっとそれは要さんが思い込んでただけですよ。その人たちは要さんのことを友達だとは思っていませんよ、絶対」

「だ、断言された!」

「ま、そんなことはどうでもいいです。要さんのことなんて考えるだけ時間の無駄です」

「俺の扱いがどんどん酷くなっていく……。」

観鏡 要の能力が目覚めるのは、きっともうすぐ……のはず。

守護その2：地獄の訓練（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

この小説、なかなかきついものがありますね・・・。

ま、途中で投げ出す事はしたくないので、少しでも良い方向へ向かうよう、頑張ります。

感想、評価、ドシドシお願いします。

守護その3：能力開花（前書き）

楽しんでいただけたら幸いです。

守護その3：能力開花

「くっ、どうすりゃいいんだよ…。」

爆音。

要の隠れていた車が吹っ飛ぶ。

そして、車のあった場所に穴とも言える大きな爪跡が残る。
コンクリートがはじけ飛び、要の上に降り注ぐ。

「っ痛うつ！あんなの喰らったら…！」

死んでしまう…！

そう思い、要は必死で逃げ続ける。

「ちっ、ちくしょー！」

要は叫ぶ。

その声を目印にして、神様への刺客がこちらに向かって巨大な爪を振り下ろしてくる。

間一髪でその攻撃を避ける要。

「くそっ、こんな事になったのも全部あいつのせいだ！」

・ ・ ・ ・ ・

・ ・

「要さんはどうも素質がありませんねえ…。」

訓練後。

幾ら危険な目に遭わせても能力が開花しない要に向かって、少女はそう言った。

「んー、この程度の危険じゃ駄目なのかな…。」

神様もそんな事を言う。

「ちょ、ちょっと待てよ！てことは、もっと危険な事させられんのか!？」

怯えながら恐る恐るたずねる。

「残念ながらそうするしかなさそうですね…。」

「致し方ないのう」

二人が溜め息を吐く。

「お、おい…!」

「おぬしには早く能力を目覚めさせてわしを守ってもらいたいからのう」

「でも、どうすればいいんでしょうね…。」

うーん、と二人は悩み始める。

要が口を挟む。

「な、なあ、とんでもない事は考えんなよ?。」

「そうだ!。」

その時、少女の頭の上辺りに電球が光った、…気がした。

「神様、要さんを戦場に放り込んでみましょうよ。」

「は、はあ!?!?どういうことだ!?!?。」

要が仰天して少女に尋ねる。

少女は当然のように要に言い放つ。

「つまり、要さんに、いつもわたし達がやっている任務を体験してもらおうと思うんですよ。」

「と、いうと?。」

「神様を狙う刺客と戦ってもらいます。」

「ぎゃあああああああ!?!?。」

要が四つんばいで後ずさりする。

「む、無理無理!能力なんも持ってないのにどうやって戦えと!?!?。」

「戦っている中で目覚めさせてください」

「出来るわけねえーだろ!？」

「なら死ぬだけですな」

「冷たいなあ、もう!」

「これ、うるさいぞ。とりあえず、次に出てきた刺客と戦ってもら
うかの」

「マ、マジかよ...。」

・ ・ ・ ・ ・

と、言う事なのである。

その話の後、現れた敵のところに半ば強制的に送られて今に至る。

そして、その敵というのが、

「巨大熊かよ！」

全長五メートルもあるうかという程の大きさの体を揺らし、要に近づいてくる。

熊はその巨体に似合わず、俊敏な動きで襲い掛かってくる。

「おらおらー、逃げてばかりじゃ勝てないぞおー」

「って、クマしゃべんのかよ！」

「なんだあゝ？しゃべっちゃわりいのかあゝ？」

「ちっ、この不思議生物が…！」

怒涛の攻撃を避けながら要は呟く。

「うーん、どうしたもんかな…。」

「おらおらあ！考え事している暇があるのかあ！？」

「…くっ！」

駄目だ、避けられない…！

要がそう確信したとき。

「…だから素質がないっていったんですよ」

少女の小さな背中。

しかし、今の要には誰よりも大きく、頼りがいのある背中。

少女が要に背を向けて、その手に持つムチで巨大な爪を受け止めて

いた。

「やっぱり、やめとけば良かったですね…。」

「お、お前!？」

「要さんのことを見捨てたりはしませんよ。とりあえずちゃっちゃんと終わらせちゃうので待っててください」

「ぐ、ぐう?」

巨大熊がひるんだ隙に、少女が的確に相手にしなるムチを打ち込んでいく。

その一発一発に、どのくらいの威力が込められているのかはわからない。

が、しかし、その攻撃の一回一回に熊がのけぞるところを見ると、相当の威力があることが見て取れる。

「す、すげえな…。」

「ぐうっ、こうなったら弱そうな奴だけでも…!」

巨大熊が要一人に狙いを絞る。

「な、なにっ!？」

「要さん!…!」

飛び掛ってきた巨大熊から、要をかばい爪の一撃をくらって吹っ飛ばされる少女。

「だ、大丈夫か!？」

少女は気を失っていた。
額からは血が一筋。

「ち、畜生、俺のせいで…!」

「ぐふふふ…、後はお前だけだあ、…死ねえっ!」

要の体の上に爪が振り下ろされる。

そのとき。

光。

「調子にのってんじゃ、ねえよっ!」

要は手に持った赤黒い大剣で爪を受け切り、熊をはじき飛ばした。

「な、なんで…!？」

熊に近づいてゆく要。

その格好は、神に仕える者としては、ふさわしくない風貌だった。
手に持つ大剣は、どこまでも赤く、深い。

まるで。

この世の全ての血を吸ったかのような。

深紅。

そして。

目。

要の目は、白目の部分が真っ赤に染まっていた。
まるで。

この世の全ての罪を見定め、そして裁いたかのような
紅蓮。

髪が腰の位置辺りまで伸び、漆黒の黒髪にところどころ赤い線が混じっていた。

それは、神に仕える者の風貌ではなかった。

それは、そう。
まるで。

死神のような。

「よくもこいつに血を流させやがったな…、齒あ食いしばれ！」

「ひ、ひい！」

「手前エの魂、狩ってやる…。」

一刀両断。

熊は真つ二つになり、塵と消え去った。

ともかく。

要は見事、能力を開花させた。

だが、その自分の能力で大変な事件が起ころうとは。
それこそ、神も予想していなかったことだろう。

守護その3：能力開花（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

どもども、戯言です。

この小説、書き始めたときはグダグダで終わりそう、とか思っていました。が、何となく、書いてるこっちが楽しくなってきましたね…。何はともあれ、楽しんでいただけたならば幸いです。感想、お願いします。

守護その4：医務室の雑談（前書き）

更新遅いですね、僕…。

守護その4：医務室の雑談

「え！？能力が目覚めたんですか！？」

「ま、まあな！」

地下訓練所。

要と少女はそこにいた。

要は、刺客を倒した後、気を失ったままの少女を背負って本部まで帰った。

そして、少女を医務室に預け、一旦自宅に戻った。

この組織に所属しても、このことを他人にバラさなければ基本的には自由にしてもいいらしい。

つまり、本部に泊まり込んでもよし、いつもの通り自宅で生活し、任務のときだけ本部に行くのもよし、身の振りは自由である。

しかし、泊まり込む人などほとんどいない。

組織の大抵の人間は、この組織を知る前は普通に社会生活を送っていた者たちばかりである。

そのため、今までの人間関係を崩したり、仕事や学校などを辞めてまで熱心に神様の守護をしようという人は、あまり居ないのである。

ま、そういうことで家に戻った要なわけだが、特別今の仕事や人間関係が良かった訳では無かった為、荷物をまとめて、マンションを解約して、本部に居座ることにしたのである。

そして、本部に戻ってきて、訓練でもするかというときに、少女が起き出してきて訓練所の前だったり、というのが今の情景である。

「で、どんな能力だったんですか？」

「教えねー」

「ひ、酷い！せっかく助けてあげたのにいゝ！こんなことなら見捨てて殺されてればよかったのにいゝ！」

「不吉なことを言うんじゃないよ！」

「じゃあ教えてくださいよ、能力！」

「それは無理だな。自分でもよく覚えてないから」

「はあ！？」

目ん玉をひん剥いて驚愕する少女。

「じゃあ、どうやって能力を発動したかも覚えてないんですか？」

「まったく覚えてねえ」

「じゃあ、やっぱり戦闘は出来ないんじゃないですか！」

「いや、感覚だけは覚えてる…、気がする」

「気がするだけじゃダメなんですよお！ちゃんとできなきゃ！」

「だいじょぶだいじょぶ、そんな時は身体が勝手に動き出すって」

「んなわけないだろうが！」

はい、ここから箇条書き。

1、少女の右ストレートが要のこめかみにジャストミート！！

2、振り抜かれる少女の拳。

3、空を舞い踊る要。

4、誇らしげに拳を振る少女。

5、まるで一陣の風に吹かれた枯葉のようにひらひらと舞い落ちる要。

6、訓練所前の廊下に響く、何かが潰れたような着地音。

箇条書き終了。

後には、無残にも潰れたカエルのような屍が残ったのだった…。

「…。」

要が次に目を覚ましたのは本部の医務室だった。

「つつ！ちくしょー、本気で殴りやがって…、まだ頭がじんじんす

るぜ」

「お？やっとお目覚めかい？」

そこでやっとなはベッドの横の人影に気付く。

「ん？誰だ？」

「誰だとはご挨拶じゃないかね？うん？今まで看病してやっていたのはこの私だと言っのに…。」

につこりと笑って、医務室担当のエルフ、ミリアンが要に話しかける。

「あ、ここ医務室なんだっけ」

「そうさ。…ところで、何であんなことになってたんだい？」

「あんなことって？」

「お前さんが、気を失ったあの子を背負って医務室に来たと思ったら、次は逆の立場であの子がお前さんを背負って来たんだぞ？なかなか楽しそうな情景ではないか？」

「別に楽しそうではないだろうがよ…。ただ、あいつにぶん殴られただけさ」

「ぶん殴られたらぶん殴られたなりの理由があるんだろう？それを聞かせておくれよ」

「別に教える義理は無いし、聞いても別に面白くないぞ?」

「いや、面白くなくてかまわないさ。どうせ私の暇つぶしだ」

「ならなおさら教えねー」

「なに?こんなに頼んでるのに教えてくれないのか?昼と無く夜と無く付きっ切りで看病してやって、添い寝までしてやったというのに」

「そ、添い寝だと!?!」

「ちゃんと写真を撮ってあるぞ?こう、君が私に抱きつくように寝ている姿がな」

「なあ、もしかして俺は今、脅迫されているのか?」

「いや別に、そういう事ではないさ。ただ教えてくれなかったら、私とお前さんはそういう仲だったと、本部のみんなが知るだけで」

「そついうのを脅迫って言うんだろぅがよ!」

「いいじゃないか、うん?自分で言うのもなんだが、私は結構な美人さんだぞ?そんな私とこついう仲だったと本部のみんなが知れば、お前さんのことをみんながうらやましがるぞ?」

「うらやましがられて、俺は確実にあんたのファンクラブの奴らに殺されるだろぅな」

「ほらほら、死にたくなかったらさっさといわんかね」

「さっきまで脅迫が暗示的だったのに、いきなり直接的な攻撃になった!？」

そして、要は結局本当のことを話した。

・ ・ ・ ・ ・

「なんだ、そんなことなのか」

ミリアンはさもがっかりしたように呟いた。

「だから言っただろうが、聞いても面白くないぞってな」

「いや、それでも少しは期待していたんだ。なのに本当の面白くないだなんて…。」

「それはしょうがないだろう」

「いや、しょうがない。お前さんは私を楽しませるために、もっと盛り上がった話し方をしたり、あちこちを面白おかしく脚色し

なければならぬ義務があるんだ！」

いきなり激昂するミリアン。

「なのに、なんの工夫もせずに話すなんて…、これは駄目だ！万死に値する！覚悟しろ貴様！この私が撮った写真をばら撒いてくれる！」

いきなり立ち上がり引き出しからたくさんの写真を取り出す。

「ふふふ、これだこれだ！見ている貴様！お前さんが気を失っていたから悪いんだぞ？私はお前さんが寝ている間にお前さんの体にあることやこんなことをしていたんだ！もちろんその写真も撮っている…、これをばら撒かれたらお前さんはこの先ここでは生きてゆけなくなるぞ？それでも良いのか？嫌ならばもっと面白おかしく脚色して話しておせ！そうすれば今回は見逃してやるぞ？」

「あんた、ちよつとした話でむきになりすぎだ…。」

ちえつ、わかったよ…。

そついつて要はさっきした話を面白おかしく脚色して話して聞かせた。

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・

「はは！ふはは！ははははは！そうか！そんなことがあったのか！ふははははは！」

ミリアンは話を聞いている間、終始笑っぱなしだった。

「そ、そんなに面白かったのか？」

「いや、別に話自体はそれほどでもなかったのだがな？こっ、話が浮かばなくておろおろしているお前さんを見ているとな？」

そういつてミリアンはまた笑い転げる。

「失礼な奴め……。」

そのとき、医務室に警報が鳴り響いた。

「な、なんだ！？」

「うむ、どうやら刺客が現れたみたいだな」

「ま、マジか！？だったら早く行かないと！」

「別に私たちが行かなかったところで他の奴がいくんだが……。ま、

いいか、よし、要君、今回の刺客は私と一緒に共同前線ということ
でどうだ?。」

ミリアンが手を差し出してくる。

「なんだ、あんたも戦えるのか?。」

「もちろんだ、結構強いぞ?。」

「…いいだろう、じゃあさっさといっしょにいっせー!。」

要はミリアンの手を取った。

守護その4：医務室の雑談（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

ほんとに更新遅いですね、僕…。

お待たせして申し訳ありません。

これに懲りずに更新を待っていただけだと幸いです。
では、感想よろしく願います。

守護その5：共同前線（前書き）

更新の遅さは天下一品な僕。

守護その5：共同前線

「無理！やっぱ無理だってこんなのお！」

観鏡要は追いかけていた。

巨大な蜂に。

その蜂といったら、全長6mはあろうかと言う程の巨体で、恐ろしい位の速度で要に迫ってくる。

お、音速超えてるんじゃない？

要はそう思った。

が、そんなことはなかった。

恐怖のあまり感覚がおかしくなっているだけである。

やられる側というのは得てして皆そういうものだ。

今回は、本部医務室の管理人、白衣のちょっと男勝りなエルフ、ミリアンと共同前線を張った筈なのだが。

「お前がどのくらいの力量を持っているのか見定めてやろうではないか」

との事で。

今は近くの喫茶店でのんびりお茶している。
無論、お店の人などとうに逃げているので、勝手に店に入ってコーヒーをかつぱらってきているだけなのだが。

吹き飛んでくる車や建造物の破片などをうまく避けながらつまそうにコ・ヒーをすすっている。

その身のこなしから見て、強いというのは本当らしい。

しかし、ここまでボロボロにやられている要を見ても助けないのは、要がまだ死ぬことは無いというのがわかっていいるからだろう。

要の姿は、所々衣服が破れてはいるものの、直接的な傷はほとんど負っていない。

玄人が見たならばまだまだと言うかもしれないが、一般人から見ればかなり運動神経の良い人に見えるだろう。

突撃してくる蜂の巨大な針をかわし、蜂が吹き飛ばしたコンクリートの破片の雨を潜り抜ける。

きつと普通の人間ならば無理な芸当だろう。

だが、一度能力を開花させれば、基本的な運動能力は飛躍的にアップする。

能力が目覚めたことで、今まで使っていなかった部分の脳の鍵を開けるとかなんとか。

とにかくそういうことらしい。

それでも、逃げ続けるにも限界がある。

勿論、要も攻撃をしてはいるのだが。

いかんせん、落ちている石を投げただけではどうにも…。

要の体力も限界が近付いていた。
そのとき。

「さあて、そろそろ要君の体力も尽きそうだし、私の出番かな？」

ミリアンが椅子から立ち上がった。

「よいせつと」

ミリアンは巨大な弓を、魔法のように手から取り出す。

「やっぱり弓はかつこいいよなあ？ 青年」

その弓は白く、ぼんやりと光っていた。

きつと未来の不思議素材。

そんな弓を構えた。

矢もあてがっていない弓の弦を力いっぱい引いた。
すると。

本来矢があるはずの場所に光が集まっていた。

その光は矢の形に。

狙いを定め、弦を放した。

すると光の矢は、目にも止まらぬ速さで飛び、蜂の胴体部分に突き刺さった。

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ガラスの破片でガラスを引っ掻いたような叫びを上げる巨大蜂。

ミリアンはまたも弓を構える。

今度は、たくさんの光の矢が弓に集束されていく。

「こんなこともできるんだよ？」

弦を放した途端、何十本もの光の矢が敵に襲い掛かる。
まるで散弾銃のような矢の嵐。

それは次々に蜂の体に突き刺さっていった。

「今度は溜め打ちだぞ？」

弦を引き、離さずにそのままにしておく。

すると矢がだんだん巨大になり、ついには大木並みの大きさにまでなった。

「巨大蜂くんよ、遺言はあるか？」

そういつてミリアンは弓を放した。

巨大な光の矢は、遺言を残す時間も与えずに巨大蜂の体を貫いた。

声もなく蜂は地面に墜落し、そのまま息絶え、消滅した。

「…さっきの蜂、遺言ありそうだったけど？」

「ほう、それは悪いことをした」

その場で二人の戦いを見ていた要は、ようやくと決着がついたときを見計らい、ミリアンに声を掛けた。

「しかし、何故に能力を使わなかったんだ？」

「やり方を忘れたんだよ」

「ふうむ、なかなか厄介だな」

ミリアンは首をかしげる。

「ちゃんと自分で能力を解放できるように、またきみをぶん殴った少女と訓練をしてもらわなければいけないな…。」

「げっ？それは絶対に嫌だ」

「ふふん、そうだろうな。それでは、私が稽古をつけてあげようではないか？」

「いいのか？」

「構わないさ。私も君の能力には興味があるしな」

「なあるほどねえ」

「もし君の能力が接近戦タイプのものであれば、私と君と少女で組んで、近距離中距離遠距離で、ジェットストームアタックとかできるぞ？」

「えらい楽しそうだな…。」

なんて雑談をしながら、二人は本部に帰っていった。

守護その5：共同前線（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

更新遅くてかなり申し訳ないです。

テストがあつたり、指に火傷したりと、いろんなことがあつたんです。

なにを言っても言い訳にしかありませんが…。

感想、評価、よろしく願います。

守護その6：女医と訓練！

「お、おい！ちょっと待て！待てって！」

観鏡要は追いかけていた。

医務室の女医、ミリアンに。

「おいおい青年！そんなんで刺客に勝てるのかあ！？」

「…くっ！ここにはどさしかないのか！？」

きつとあの少女よりも酷い。

と、要は思った。

しかし、あの少女も大層などさ振りだったのを、今の現実にかき消されているだけである。

実際同じくらいのださ振り。

しかし、人間は今しか見つめられない生き物なのである。

やられる側は得てしてそういうものである。

…前にもこんなこと言ってなかったっけ？

「おらおらおらおらおらおらおらおらおらおら……！」

要を追いかけてながら矢を乱射してくるミリアン。

当たったかどうかはわからない。

案の定矢の一本が要の背中当たる。

「ぎゃふん……！」

奇妙な悲鳴を上げて吹っ飛び、床に抱きつく格好になる要。
しかし大した怪我は無い。

一応出力の手加減はしているらしい。
が、要は白目をむいて気絶している。

この人は一体なにをやっているんだか。

「あゝあ、こんなことでへこたれてしまうなんてな……」

期待外れだ、と首を横に振る。

いや、お前が悪いんだろ、なんて誰も言っていないけれど。

「とにかく、一度医務室に連れて行かなければ……」

「…いや、いい」

「ん？」

ゆっくりと目を開けて立ち上がる要。

「おお、まだ戦えるのか？」

「おう！これしきでへばる俺じゃないぜ！」

さっきまで白目をむいて気絶していた人間とは思えない復活振りだった。

「ようし、それではもう一度たっぷりしこいてやろっつ…、さっきの三倍くらいな！！」

「来い！やったるぜ！」

威勢がいいのは初めだけだった。

ボコボコにされて医務室に寝かされている要と、それを看病しているミリアン。

それが15分後の情景だった。

なんというか、予想通りというか。

きっと読者の大半がこの展開を予想していたと思う…。

この小説は期待を裏切らない小説にしたいのです！（戯言談）

と、いうことで、この展開。

要とミリアンのいちゃらぶを書きましょう。

「う…ん、あれ、ここは…」

「うん？気がついたか？」

ベッドに寝ている要。

に、添い寝しているミリアン。

「お、おい！なにをしてんだキサマ！」

「看病だろうが、看病、かーんーびょーう！青年が目を覚ますまで人肌の温度で暖めてやっていたのではないか？感謝しろよ？」

「…まさか、また写真を撮っているのか？」

「当然だろうが」

即答され、絶望的な顔をする要。

「…次は何をすればばら撒かないで済ませてくれるんだ？」

「別にばら撒くなんていつてないではないか？」

「じゃあ…、ばら撒かないのか…？」

「そうとも言っていない」

「なんだよチツキショー！」

「今回は、青年の能力が見れば良いでしょう」

「それは無理だな」

即答する要。

落胆するミリアン。

「そうか、ならば仕方が無い。…この写真はわたしのブログのトップページに貼り付けておくこととしよう」

「全国ネットで流す気か！？」

「仕方なからう？きみが無理ならそうするだけだ」

「んー…、ああもう！わぁーったよ！やりやぁいいんだろっ？やりやぁー！」

いいのは威勢だけだったPart 2。

案の定、床にへばりつく要。

「…やっぱりあの女の子よりどSだよなあ…」

同じくらいである。

今の現実に掻き消され以下略。

人間は今しか見つめられな以下略。

やられる側は得てして以下略。

同じことばかり書いても微妙ですよ？

とまあ、こんな状況である。

「ふむ、何故能力が使えないのだろうな？」

「…し、知るかよ…」

「うーむ、しょうがないか。あの写真はネットで公開しよう」

「さ、させるかよ…！」

「な、なにい！？」

赤黒く光りだす要の体。

その瞬間、要の体は以前と同様、恐ろしげな物へと変わっていた。

そして、赤黒く光を放つ身の丈以上の大剣。

なぜこんな緊張感のない場面で変身を？

誰もがそんな疑問を、いま、持っているはずである。

それは、あとで明かされるので、しばし待っていただきたい。

今は、なにも知らぬ振りをして、ギャグシーンなのに無駄にシリアスという、近年稀に見る不思議な状況を楽しんでいただきたい。

いまの作者に言えるのは、それだけである。

「テメエ…、それ以上その写真を公開するのを止めないと言い張るのなら…、俺がここでキサマの命を刈ってやる…！」

「ふん…、なるほど、きみの能力はそんなに強力なものだったんだ

な…。自分で制御できないのもうなずける…」

「ああ？つべこべ言わずに…、その写真をよこしやがれえ！！」

ミリアンに飛び掛る要。

それを迎え撃つミリアン。

交差。

数瞬の後、倒れたのは要の方だった…。

「ふん、能力が開花したての素人ごときに、この写真を盗らせやせんよ」

うつ伏せに倒れた要を見下ろすミリアン。

「しかし…、流石にわたしも、ノーダメージではすまなかった、よう…だな」

そういつて、床に倒れこむミリアン。

写真は、まだミリアンのものであった…。

写真ごときなのはかばかしいまでの真剣さでこの章は幕を閉じるのである。

守護その6：女医と訓練！（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

ちよつと、自分で書いててバカらしくなりました。

でも、このアホっぱさがきつとこの小説にはぴったりなんだと思います…、たぶん。

これ以上のアホっぱさを追求して、次の章は更に変な感じになると思うので、覚悟しておくと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0589e/>

神様おまもり隊！

2010年11月13日02時58分発行